広報ふじ

(毎月25日発行)

静岡県富士市平垣279番地
発行所　富士市役所
発行人　富士市長 遠藤脩治
印刷所　加藤印刷所
No. 49
昭和34年7月25日発行

人口の動き

人口総数	45.022	男	22.534
		女	22.488
世帯数	8.591		
転出	231	出生	64
転入	284	死亡	25

婚姻	富士 25	田子 7	岩松 6	計 38
離婚	富士 1	田子 0	岩松 0	計 1
死産	富士 1	田子 0	岩松 1	計 2

(昭和34年7月1日現在、住民登録による)

財政事情の公表

〝伸びゆく市財政〟

33年度最終予算(一般 特別 会計)

純計実に八億二千八百万円にのぼる

富士市では、条例にもとずいて年二回(六月と十二月)にわたり市の財政事情を市民に公表しております。今回の公表は、昭和三十三年十月一日より昭和三十四年三月三十一日まで(後期分)にかかる昭和三十三年度富士市一般会計才入才出予算の執行状況を中心にこれに伴う富士市の財政の動向を記したものであります。市財政の重要性については、いまさらここで述べるまでもなく市民の生活に深いつながりをもち、市政は市財政によつて支えられるのであります。

いま仮りに富士市内の道路、橋梁、学校、水道、病院施設等を一時につくるとしたら莫大な経費を必要とし不可能なことであります。今日より明日と市民の生活の向上をはかり、高度の文化都市を建設することが、市政の目標であります。

市民のみなさんにこの財政事情を見ていただくことにより、市財政の実情をご理解ねがい、今後更に市財政の充実、健全化を念願いたしますと共に市政の推進についても格別のご協力をお願いするものであります。

市財政の動向と方針

地方団体の会計は毎年四月一日に始り翌年三月三十一日に終了いたします。今回の報告では昨年十月一日から本年三月三十一日までの間における市の財政の動きを説明いたします。

昭和33年度一般会計予算

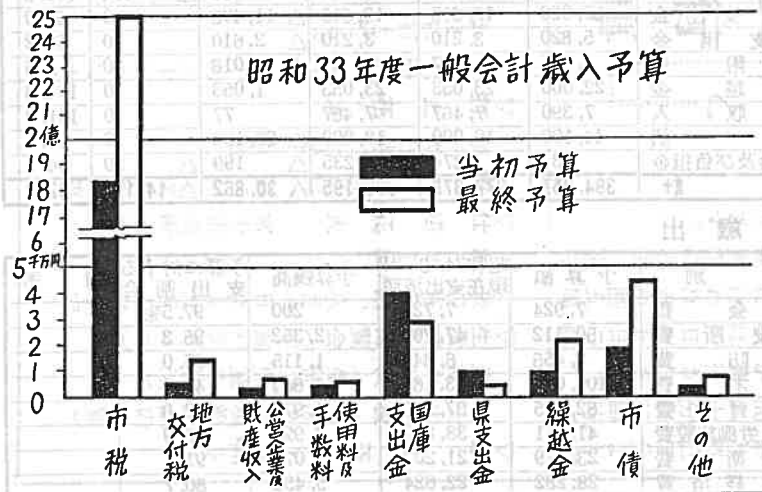
昭和三十三年度の一般会計予算は昨年九月末現在で三四〇、一四九、九〇〇円でありましたが、その後昨年十月四日及び本年一月一十一日の追加更正予算及び二月二十八日専決処分による追加予算とによつて三九四、〇五六、五〇〇円となり約五、四〇〇万円の増加を見て年度末を迎えることになりました。

以上の一般会計予算の追加状況をまとめると第一表のとおりであります。

第1表　**昭和33年度一般会計予算の推移**(単位千円)

区分	予算額	指数	増減(△)
当初予算	288,007	100.0	—
昭和33年9月末現在	340,250	118.1	52,243
昭和33年10月4日追加更正	360,592	125.2	20,342
昭和34年2月21日追加更正	393,959	136.8	33,367
昭和34年2月28日専決(最終予算)	394,057	136.8	98

第2表



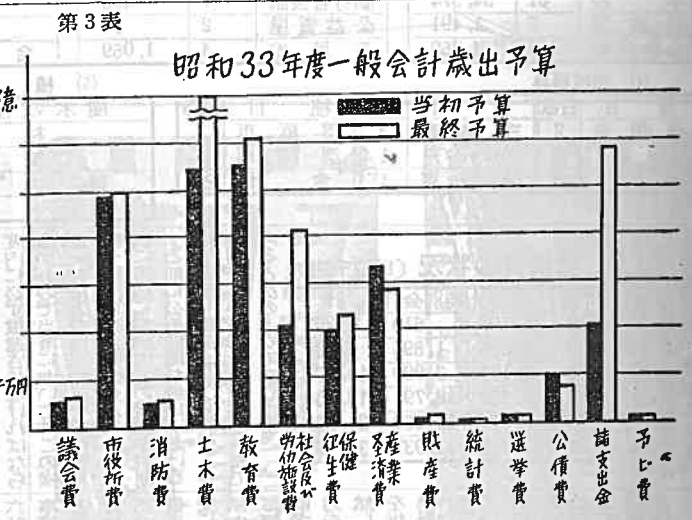
この結果昭和三十三年度の最終予算は、昭和三十二年度の最終予算三六七、三〇八、六八〇円に比べて約一、七〇〇万円の増となつたのであり、この内大部分が昭和三十三年度予算熟行における投資的事業費の増加分であります。又この反面消費的経費は出来得る限り切詰め絶対最少限の支出のみに抑制し財政の合理化を図つたあらわれであります。別表の通り昭和三十三年度一般会計才入(第一表)才出(第三表)予算により当初と最終予算を比較しますと、当初予算額二八、八〇〇万円に対し約一〇、六〇〇万円増で割合にして三・五割余の増加となつています。

追加額は土木費がトップ

この増加の内容を見ると、ここに地方財政の特有さが伺われます。即ち第三表にみられるように増加額の使途の大体過半を占めるのは土木費の四、五〇〇万円余であり次いで諸支出金の三、七〇〇万円余、社会及び労働施設費の二、〇〇〇万円余、教育費、保健衛生費の順となつています。これは事業の効果が後年度に及ぶ投資的事業について多額の追加が必要であり且つ余儀なくされることを示し、他方第二表に見るように、この増加額に見合う歳入の面では、その約三分の二の六、八〇〇万円余の自己財源である市税に依存し以下市債一、五〇〇万円、繰越金一、二〇〇万円、地方交付税九〇〇万円余の順となり、この内特に注目すべきは当初見込んだ国及び県の支出金については最終予算に於いて国庫支出金の約一、〇〇〇万円、県支出金の約四〇〇万円の財源の調達が不可能となつた事であります。この事は市が行う建設的事業は予算編成当初は国、県に依存する度合が強く、自主的にこれらの事業を行うに足る財源のないこと、事業の実施もやや遅れること、他律的になりがちであることであります。然しながら税収の如き安定性ある財源がさきに述べた通り最終予算に於いて計上し、これをカバーし得たのはこの財源を洗いざらいに徴収しつくしていることを意味しております。

次に追加予算の歳出の内容について多少細部に立入つて説明いたします。

第3表



1　追加額の第一位は土木費の四、五一八万円であり、追加額全体の四一、六%を占めております。この内訳はその大半を占める港湾費の田子浦港整備事業地元負担金二千九百二十七万七千円(公共分五百二十五万円、県単独分二千四百二万七千円)と都市計画費七百八十二万円(県道田子浦加島線拡巾、静岡下田線舗装、加島富士停車場線舗装、沼川橋梁架替、各地元負担金三百六万円、富士鷹岡線及び蓼原富島線物件移転補償金三百六十四万円、富士鷹岡線工事費百十二万円)及び道路新設改良費四百九十七万円(川原宿藤間線、水戸島森島線改良工事二百万円、県道富士川大宮線、南前田線藤間線賠償改良地元負担金一百九十七万円(台風十一号、二十一号災害復旧工事費)が主なものであります。

2　追加額の第二位は諸支出金の三千七百十一万円余であり、追加額全体の三五、〇%を占めております。この内訳の主なものは繰替金一千百十五万円(県道富士川大宮線、田子浦加島線、静岡下田線に対する一時立替払金及び県住宅公社分譲住宅分立替払金)と地方振興費の内一千二百十八万円(財団法人富士市体育館へ一千十万円、富士高等学校外交付金二百八万二千円)及び市立富士中央病院特別会計へ一千万円の繰出金(増改築に伴う財源補塡のため)身延線西廻り、駅舎改築に伴う鉄道債券引受(額面三千万円)補塡金二百四十五万九千円余であります。

3　追加額の第三位は社会及び労働施設費の二千万円であり、追加額全体の一九、一%を占めております。この内殆んどが住宅建設促進費一千八百万円で、これは厚生年金還元融資により本州、東芝に転貸する住宅建設資金貸付金で当該工場が事業遅延のため昭和三十二年度よりの繰越に係るものであります。

4　追加額の第四位以下は教育費の六百七十万円、保健衛生費の三百万円。財産費七十九万円。市役所費五十万円、議会費三千六百三千円、消防費三十万円の順であります。

5　次に予算が減額されたものは産業経済費の五百四十二万九千円、公債費二百七十万円、選挙費八万九千円、計八百二十一万八千円であります。

この内産業経済費については農林水産振興奨励費の部蔬菜農改善奨励補助金二千百八十七万六千円を追加計上したのでありますが商工振興奨励費の防火建築造成補助金一千九百三十二万六千円を減額更正したためこの様な結果となつたのであります。この事業はさきに述べた通り才入面についても国県の支出金とも関連があり、これらの財源の裏付如何によつて事業が左右される可能性が大であります。公債費については当初予定した一時借入金の利子が不用となりこれは歳計現金の調達が円滑に執行出来たためであり選挙費は市長選挙の無投票による経費の節約であります。

特別会計予算

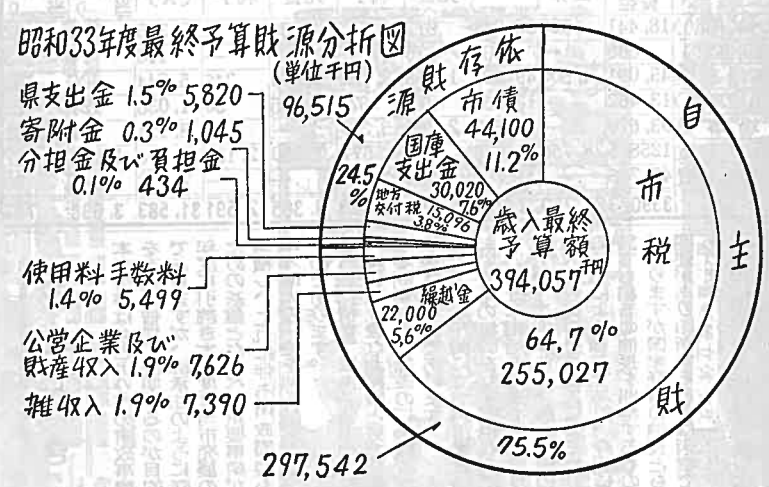
一般会計のほか本市には特に事業経理のために設けられた六つの特別会計があり、昭和三十三年度におけるこれらの予算の合算額は一般会計予算に比べてこれを上廻ること約一割余の額に達しておりますが、当初予算の合算額に対し最終予算の合算額は約二割四分、八千四百万円の増となり総体として四億三千四百万円余となりました。その増加状況は第五表にみられるとおりであります。これを各会計別に概略を記すると、まず病院会計において厚生年金還元融資八千九百万円(昭和三十三年度分七千万円及び昭和三十二年度分一千九百万円の繰越分)による病院増改築(一般病棟及び結核病棟建設費)事業費の第一回追加に基く四千四百七十九万四千円の増が主なものであり

次に競輪会計に於いては当初昨年八月伊東競輪共催分として九千七百万円余を計上し、その後本年二月富士市単独開催分二千八百七十九万三千円余を追加したものであります。水道会計に於てはこの事業の主要財源である起債六千万円の起債許可により順調に予算執行がなされたのでありますが一部駅北東部配水管布設その他各所配水管布設による工事請負費及び原材料費四百二十五万円の追加分であります。

国保会計においては療養給付費の増加分であり、その外質屋、と場会計はおおむね当初予算通りの執行であります。

昭和三十三年度予算の総体は、この特別会計予算、純計して八億二千八百万円余となつたわけで、今や市制施行五周年を迎えるに当り、その予算規模が拡大されつつある事は明らかであり、この事はそのまま新市建設の基礎確立の現れであると共に地方自治の著しい進展拡大財政における経費膨張の必然性等の事柄を瞭然にしているものといえます。

第4表



あります。

以上何れにしても、この追加更正予算により新たな事態に即応して重点的に経費の支出を図つた外、これに見合う才入の面では公共事業削減による国、県依存財源を減自主的財源を以つて新規需要に充塡し、市政に対する市民各位の要望に応えたのであります。次に参考迄に最終予算の財源を分析すると、次の図の通りとなります。

かたわら市税を中心とする